

# 「特別の教科 道徳 学びの会」参加者の意識調査

沖林 洋平<sup>\*1</sup>・松岡 敬興<sup>\*2</sup>・森重 孝介<sup>\*3</sup>・上川 里穂<sup>\*4</sup>・久保田高嶺<sup>\*5</sup>・藤永 啓吾<sup>\*6</sup>

A Survey of Participants' Attitudes toward "the Study Group of Ethics"

OKIBAYASHI Yohei<sup>\*1</sup>, MATSUOKA Yoshiki<sup>\*2</sup>, MORISHIGE Kosuke<sup>\*3</sup>, KAMIKAWA Riho<sup>\*4</sup>,  
KUBOTA Takane<sup>\*5</sup>, FUJINAGA Keigo<sup>\*6</sup>

(Received August 3, 2020)

キーワード：特別の教科道徳、意識調査、教員研修

## はじめに

山口大学教育学部附属学校では、『特別の教科 道徳』学びの会（以下、「学びの会」）と題する、教員や一般の教育関係者、教職を志す大学生等を対象にした研究会を継続的に行っている。学びの会では、平成30年度から小学校、平成31年度から中学校で、教育課程における道徳の時間が「特別の教科」化されることを踏まえて、平成29年度より発足した。取組については主に道徳科の授業づくりの在り方や評価方法等に関して、山口県内外へ情報を発信し、参加者の意識を啓発するとともに、参加者同士で広く考えや意見を交流している。この研究会は過去8回実施し、7回は300人程度、8回はオンラインでの取組で400人程度の参加者が集まっており、研究会に対する関心の高さを示唆している。

研究会のテーマは、道徳科に関する授業づくりの基礎・基本や先人の生き方、ユニバーサルデザインを取り入れた考え方、現代的課題等、教職現場にある課題を広くカバーするものである。例えば、第5回では、「楽しく体験！多様な指導方法（光小学校 久保田高嶺）」、「楽しく体験！道徳授業（山口小学校 森重孝介）」、「模擬授業で楽しく学ぶ（光中学校 藤永啓吾）」、「道徳科の授業（道徳科の授業の教育的意義に関する講義）（下関市教育長 児玉典彦）」であった。このような研究会を連続的に実施することは、附属学校から県内外の教育関係者への発信力の確保につながると考える。

表1に第1回から第7回までの学びの会の開催日時、開催場所、および講演者と講演内容の概要を示す。

本研究では、第7回の参加者に対して、参加者の属性情報と学びの会に対する意識を調査することで、参加者の属性の傾向と、学びの会に対する印象を分析した。

## 1. 方法

### 1-1 実験時期

本研究は、2020年2月9日に実施された「特別の教科 道徳学びの会」終了後に行われた。

### 1-2 調査対象者

本研究の調査対象者は道徳学びの会参加者のうち回答が得られた186名

### 1-3 材料

本研究では以下の質問項目を設定した。1. 性別 2. 職務年数 3. 所属校種 4. 専門(1. 道徳、2. 教科、

\*1 山口大学教育学部小学校総合選修 \*2 山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻  
\*3 山口大学教育学部附属山口小学校 \*4 山口大学教育学部附属山口中学校 \*5 山口大学教育学部附属光小学校  
\*6 山口大学教育学部附属光中学校

3. 生徒指導、4. マネジメント) 5. 参加回数 6. 学びの会参加に対する意識を尋ねる項目。使用した質問紙を資料として文末に掲載した。項目は、これからも参加したい、次の開催を楽しみにしている、同僚に知らせたい、他教科の授業づくりに役立つ、幼小中高を選ばず役立つ、教育相談や生徒指導にも有効だ、法定研修で行われてもよい、「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりに役立つ、最新の教育の話題について知ることができる、であった。回答は4件法(そう思わない;1、あまりそう思わない;2、少しそう思う;3、そう思う;4)であった。

表1 学びの会のこれまでの開催スケジュールと講演者、講演内容

	日時	場所	講演者と講演内容
第1回	2017年8月20日(日)	山口大学教育学部附属山口小学校	森重孝介・藤永啓吾 道徳の教科化に向けて
第2回	2017年11月5日(日)	山口大学教育学部附属山口小学校	児玉典彦・坂本哲彦 森重孝介・藤永啓吾 久保田高嶺・中原育代 道徳科の授業づくり
第3回	2018年1月28日(日)	山口大学教育学部附属山口小学校	児玉典彦・坂本哲彦 藤永啓吾・久保田高嶺 明日からできる道徳の授業づくりのポイント
第4回	2019年2月9日(土)	山口大学教育学部附属光中学校	鈴木克治・山田貞二 温品賢二・森重孝介 藤永啓吾・久保田高嶺 明日、道徳してみたいな♪
第5回	2019年5月4日(土)	山口大学教育学部附属山口小学校	児玉典彦・森重孝介 藤永啓吾・久保田高嶺 道徳って楽しいな♪
第6回	2019年8月17日(土)	山口大学教育学部附属山口中学校	森重孝介・藤永啓吾 道徳科と道徳教育
第7回	2020年2月9日(日)	山口大学	永田繁雄・坂本哲彦 温品賢二・森重孝介 藤永啓吾 明日、道徳してみたいな♪

#### 1-4 手続き

本研究の調査は学びの会受付時に配布され、終了時に受付で回収した。その他の調査も含め、回答には3分程度を要した。

## 2. 結果

参加者の属性に関する回答の結果を示す。

表 2 性別と学校種のクロス集計表

	男性	女性	合計
保育所	0	1	1
小学校	39	72	111
中学校	24	31	55
高校	1	0	1
教育委員会	3	0	3
その他	4	6	10
合計	71	110	181

表 2 に性別と学校種のクロス集計表を示す。

表 3 性別と専門のクロス集計表

	男性	女性	合計
道徳	35	55	90
教科	20	28	48
生徒指導	7	11	18
マネジメント	5	5	10
その他	1	5	6
合計	68	104	172

表 3 に性別と参加者の専門のクロス集計表を示す。道徳を専門ととらえている参加者が 172 名中 90 名であった。参加者は男性が 68 名、女性が 104 名であった。

表 4 学校種と専門のクロス集計表

	保育所	小学校	中学校	高校	教育委員会	その他	合計
道徳	1	56	25	1	3	5	91
教科	0	28	18	0	0	1	47
生徒指導	0	9	8	0	0	1	18
マネジメント	0	8	2	0	0	0	10
その他	0	5	1	0	0	0	6
合計	1	106	54	1	3	7	172

表 4 に学校種と専門のクロス集計表を示す。小学校と中学校の両方で道徳、教科生徒指導の順で多かった。

表 5 専門と参加回数のクロス集計表

	1 回	2 回	3 回	4 回	5 回	6 回	合計
道徳	64	17	1	4	1	1	88
教科	39	6	1	1	0	0	47
生徒指導	12	5	1	0	0	0	18
マネジメント	6	0	3	0	0	0	9
その他	5	0	1	0	0	0	6
合計	126	28	7	5	1	1	168

表5に専門と参加回数とクラスタクロス集計表を示す。126名が1回目の参加であったが、約25%の42名が2回以上の参加であった。

表6 職務年数と専門のクロス集計表

	4年以下	5年から13年	14年から24年	25年以上	合計
道徳	13	30	24	20	87
教科	16	9	10	11	46
生徒指導	6	4	2	5	17
マネジメント	0	1	4	5	10
その他	0	4	1	1	6
合計	35	48	41	42	166

表6に職務年数と専門のクロス集計表を示す。4年以下、5年から13年、14年から24年、25年以上のカテゴリではそれぞれ35名、48名、41名、42名とまんべんなく分布していた。さらに、道徳を専門とする者に注目すると、それぞれ13名、30名、24名、20名と5年以上の職務年数の参加者が多かった。

表7 意識に関する質問項目の平均値、中央値、標準偏差

質問項目	平均値	中央値	標準偏差
これからも参加したい	3.78	4.00	0.53
次の開催を楽しみにしている	3.73	4.00	0.55
同僚に知らせたい	3.68	4.00	0.58
他教科の授業づくりに役立つ	3.56	4.00	0.66
幼小中高を選ばず役立つ	3.57	4.00	0.65
教育相談や生徒指導にも有効だ	3.40	4.00	0.70
法定研修で行ってもよい	3.51	4.00	0.76
主体的・対話的で深い学びの授業作りに役立つ	3.75	4.00	0.58
最新の教育の話題について知ることができる	3.68	4.00	0.61

表7に、意識に関する質問項目の要約統計量を示す。中央値を見るとすべての項目で4という値を得た。これは、参加者の半数以上が学びの会が研修として高い評価を得ていることが示された。

次に意識に関する質問項目に関する回答結果を質問項目別に示す。図1に性別による「同僚に知らせたい」の平均値を示した。t検定の結果は有意ではなかった( $t(177)=-1.236, p=.22$ )。図2に、職務年数別の「同僚に知らせたい」の平均値を示した。1要因分散分析の結果、有意ではなかった( $F(3, 168)=1.270, p=.29$ )。図3に、職務年数別の「他教科の授業づくりに役立つ」の平均値を示した。1要因分散分析の結果、有意であった( $F(3, 168)=3.026, p=.031$ )。多重比較の結果5-13年の評定値が4年以内、14-24年、25年以上のカテゴリよりも有意に低かった(それぞれ $t(168)=2.230, p<.05$ ;  $-2.517, p<.05$ ;  $-2.488, p<.05$ )。図4に職

務年数別の「幼小中高を選ばず役立つ」の平均値を示した。1 要因分散分析の結果、主効果は有意ではなかった ( $F(3, 168)=1.681, p=.173$ )。図 5 に職務年数別の「法定研修で行われてもよい」の平均値を示した。1 要因分散分析の結果、有意ではなかった ( $F(3, 168)=0.586, p=.625$ )。図 6 に職務年数別の「最新の教育の話題を扱っている」の平均値を示した 1 要因分散分析の結果、主効果が有意であった ( $F(3, 168)=4.306, p=.006$ )。多重比較の結果、5 - 13 年の職務年数の評定値が 4 年以下、14 - 24 年、25 年以上よりも有意に低かった ( $t(168)=2.429, p<.05$ ;  $-1.989, p<.05$ ;  $-3.473, p<.01$ )。図 7 に小中学校とそれ以外の「幼小中高を選ばず役立つ」の平均値を示した。1 要因分散分析の結果、主効果が有意であった ( $F(2, 176)=6.293, p=.002$ )。多重比較の結果、小学校が中学校よりも有意に低い評定値であった ( $t(174)=-3.174, p<.01$ )。図 8 に小中学校とそれ以外の「教育相談や生徒指導にも有効」の平均値を示した。1 要因分散分析の結果、主効果が有意傾向であった ( $F(2, 174), p=.094$ )。多重比較の結果、小学校が中学校よりも有意に低い評定値であった ( $t(174)=-1.895, p=.06$ )

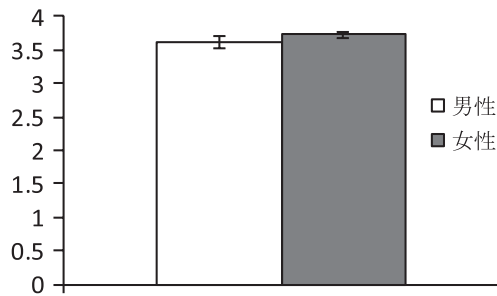


図 1 性別による「同僚に知らせたい」の平均値

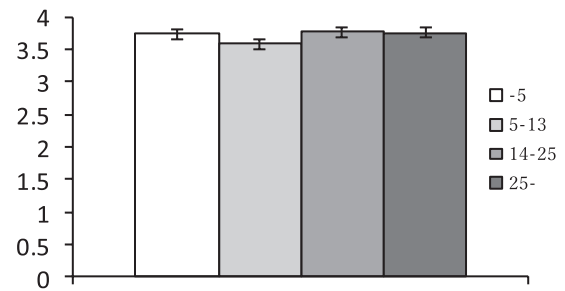


図 2 職務年数別の「同僚に知らせたい」の平均値

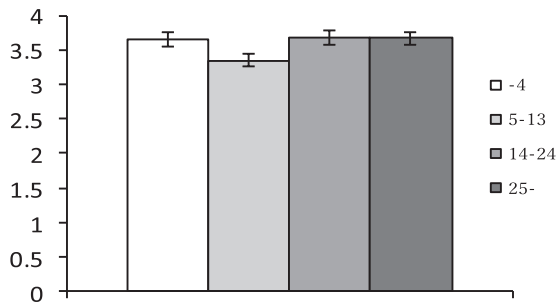


図 3 職務年数別の「他教科の授業作りに役立つ」の平均値

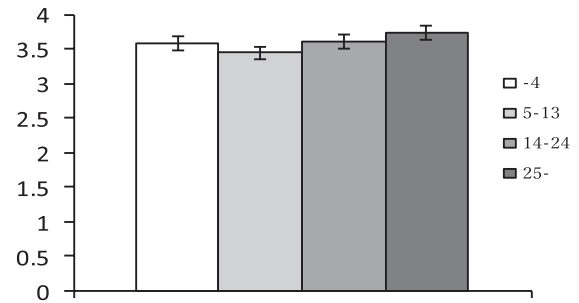


図 4 職務年数別の「幼小中高を選ばず役立つ」の平均値

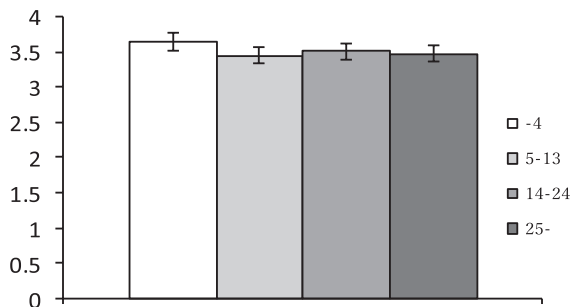


図 5 職務年数別の「法定研修で行われてもよい」の平均値

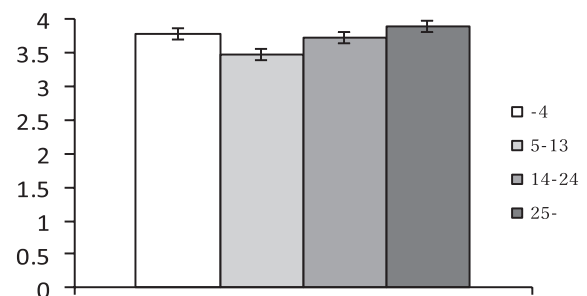


図 6 職務年数別の「最新の教育の話題を扱っている」の平均値

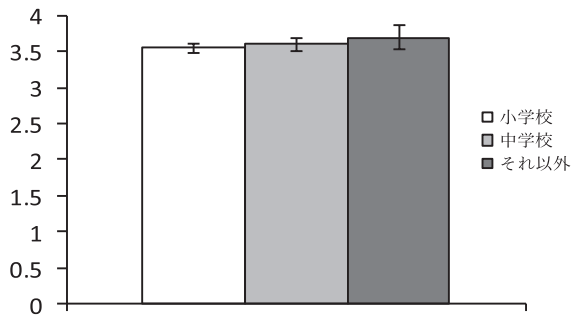


図7 学校種別の「幼小中校を選ばず役立つ」の平均値

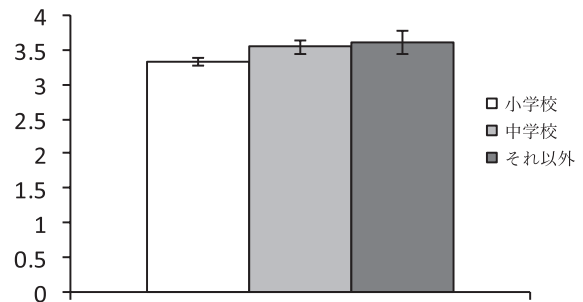


図8 学校種別の「教育相談や青銅指導にも有効」の平均値

### 3. 考察

本研究の目的は、山口大学教育学部の附属小中学校の教員が主体となって開催している研修シリーズである「特別の教科 道徳 学びの会」の参加者の会に対する意識を調査することであった。本研究では、参加者のプロフィール情報と会に対する意識を尋ねる項目を用いた。

まず、回答を得られた参加者は180を越える人数であった。山口大学が実施する教員免許更新講習では、100名を越える講座としては、いわゆる必修領域に関する科目であり、選択や選択必修の科目は大きいものでも数十名のクラスサイズである。これを踏まえると、学びの会の参加者は多数であると考えられる。また、教員の学びの会に対する関心の高さをうかがうことができる。性別の内訳は、男性71名、110名と偏りはないと考えられる。参加者の学校種は小学校が111名、中学校が55名と小中学校教員の参加者が大部分を占めていた。参加者の専門意識は道徳が91名、教科が47名、生徒指導が18名、マネジメントが10名であった。道徳が約半数を占めるが、それ以外の領域を専門とする教員の参加も多く、学びの会が多様な領域の専門性に対してアピールしていると考えられる。専門と職務年数のクロス集計の結果、4年以下、5年から13年、14年から24年、25年以上のカテゴリではそれぞれ35名、48名、41名、42名とまんべんなく分布していた。さらに、道徳を専門とする者に注目すると、それぞれ13名、30名、24名、20名と5年以上の職務年数の参加者が多かった。マネジメントでは14年以上の参加者が専門であると回答していたことは、本調査が正しく実施されたことを反映している。学びの会への参加回数は、1回目が126名、2回目が28名という回答であった。この結果は、学びの会が現在7回目の実施であることや、学びの会がもともと連続的に受講するように計画されているものではないことに起因すること考えられるが、繰り返しの参加者を募る工夫を検討する余地が残されていると考えることもできる。

参加者のプロフィール情報に関する分析結果については、次のようにまとめることができる。まず、全体的な参加者数は十分に多数であると考えられることである。2つめは、性別に偏りはないということである。3つめは、小中学校教員の参加者が多数を占めることである。4つめは、道徳を専門とする参加者を中心として、幅広い専門性に対して関心を集めていることである。5つめは、1回目、2回目の参加者が多いということである。以上の知見を踏まえると、学びの会の参加者は、現在のところ道徳を専門とする小中学校教員に対するニーズにこたえるものであると考えられる。7回の単発の講座であっても、参加者の関心を集める研修内容を提案していることが示唆される。一方、参加者の学校種で少ないと考えられるのは、高等学校の教員であると考えられる。また参加者の専門性で少ないと考えられるのは生徒指導やマネジメントを専門とする教員であると考えられる。現在、高等学校における道徳は必修ではないため、道徳の時間を教育課程に確保しなければならないわけではない。高等学校の道徳の位置づけについて文部科学省(2016)は「中央教育審議会教育課程部会考える道徳への転換に向けたWG資料4」において、「高等学校学習指導要領の次期全面改訂に向けて、社会との関わりの中で主体的に生きる力を育成することをねらいとした新科目の設置に関する検討なども踏まえ、道徳教育の改善のための検討を行うことが必要である」と述べている。また、同資料では、「教育課程企画特別部会 論点整理」(文部科学省、2015)において、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びに向かう力、人間性等)」が児童生徒の育成する資質・能力の柱の一つであることを踏まえて、「高等学校段階は、一人一人が人生を歩んでいく上での手掛かりや内面的な基盤

を確立するべき時期であり、哲学や宗教などに関する基礎的な教養を養うとともに、今日的な課題に関する多角的、批判的、創造的な議論の経験を重ねることが求められる。このことを通じ、国家及び社会の責任ある一員として必要な教養や行動規範などを身に付けていくことが期待される。」と述べられている。このような、現代の教育的課題に幅広く対応できるような研修テーマを年に1回程度提供するなどすることで、今後は高等学校の教員の関心を高める可能性を指摘したい。

次に意識項目についての分析結果について検討する。意識項目では、すべての項目において中央値が4であった。本研究で用いた項目は、学びの会に対して、「これからも参加したい」「次の開催を楽しみにしている」という期待や「他教科の授業づくりに役立つ」「幼小中高を選ばず役立つ」「教育相談や生徒指導にも有効だ」という他領域への応用に対する効力感、「法定研修で行ってもよい」という研修効力感、「主体的・対話的で深い学びの授業作りに役立つ」「最新の教育の話題について知ることができる」という教育の最新事情との関連性という諸側面について確認したものであるが、調査結果では、それらのどれに対しても高い評価を得たといえる。

各項目について、プロフィール情報に関連付けた分析結果について検討する。「他教科の授業づくりに役立つ」という項目については、5年から13年の参加者で他のカテゴリよりも低い評定値であった。「最新の教育事情を扱っている」という項目でも、5年から13年の参加者で他のカテゴリよりも低い評定値であった。また、有意ではなかったものの、「幼小中高を選ばず役立つ」についても5年から13年の参加者で他のカテゴリよりも低い評定値であった。5年から13年の参加者で低い評定値を得た項目は、他領域との関連付けに関する項目であったと考えることができる。本研究の調査結果だけでは限定的ではあるものの、5年から13年程度の職務年数の参加者は、他領域との関連付けに対して厳しい意識を持っている可能性がある。武智・チニンタ・岡谷・田中(2015)は、教員免許更新講習の受講者を対象として、若手教員に対する自分の経験を基準にして指導助言を行うことに関する調査を行った。その結果、教職経験年数が1から10年では66.7%、21年から30年では90.7%、31年以上では92.5%であり、11から20年では85.4%であった。また、勤務校数が1から2校では72.2%、5から6校では89.2%、7から8校では100%であり、3から4校では77.1%であった。なお、このような、年代や職務年数による自身の経験の伝達意思の高まりは、男性より女性の方が高い。この結果について、武智ら(2015)は、先輩教員の効果的な経験に基づく指導を受けることが、若手教員にとって重要な学びの場となり、そのうえで先輩教員の「経験」のみに依拠した若手教員への指導・助言では指導の有用性の保証は難しいと述べている。このように、経験のみを伝達することは指導の有用性を抑制することにつながりかねない一方で、本研究の結果は、5年から13年の職務年数の参加者は、自身の専門性と他領域の関連づけ(河井・溝上、2012)のあり方について模索している可能性を示唆するものである。日本の教員の授業作りに関する自己効力感の低さについては、国際比較研究で指摘されている(文部科学省、2020)。学びの会のプログラムは、道徳の授業の楽しさや具体的手法などを伝えるものを中心に構成されている。このような内容は、5年から13年の職務年数の教員の授業作りに関する手立てとなりうるものと考えられる。シュライヒャー(2019)は、Education2030時代における創造的な教員に求められる資質・能力として、意思決定の根拠となるデータを共有して活用できることや、個々の教員の専門性を獲得することを挙げている。学びの会が特別の教科道徳に関する専門性を高め、教職に関する創造性を高めることにつながることに期待する。

## 引用文献

- 河井亨・溝上慎一(2012):「学習を架橋するラーニング・ブリッジングについての分析:学習アプローチ, 将来と日常の接続との関連に着目して」,『日本教育工学会論文誌』,第36巻,第3号,pp.217-226.
- 文部科学省(2016):「道徳教育を通じて育成すべき資質・能力と高等学校の道徳教育について」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/078/siryu/\\_icsFiles/afieldfile/2016/08/22/1376178\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/078/siryu/_icsFiles/afieldfile/2016/08/22/1376178_3.pdf) (閲覧日2020年7月20日)
- 文部科学省(2017):「資料1 教育課程企画特別部会 論点整理 2. 新しい学習指導要領等が目指す姿」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1364316.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1364316.htm) (閲覧日2020年7月20日)
- 文部科学省(2020):「OECD 国際教員指導環境調査(TALIS)2018 報告書 ー学び続ける教員と校長ーのポイ

ント」

[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afieldfile/2019/06/19/1418199\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2019/06/19/1418199_2.pdf)

(閲覧日 2020年7月20日)

シュライヒャー・アンドレアス (2019) 経済協力開発機構 (OECD) (編) ベネッセ・コーポレーション (企画・制作) 鈴木寛・秋田喜代美 (監訳) 小林俊平・平石年弘・桑原啓夫・花井渉・藤原誠之・生咲美奈子・宮美和子 (訳): 「教育の世界クラス 21世紀の学校システムをつくる」 明石書店.

武智康晃・チンタアプリナ・岡谷絢子・田中理絵 (2015) : 「教職員の意識調査 (1) : 若手教師への指導基準と異動時の困難に着目して」『山口大学教育学部研究論叢 第三部』, 第 65 巻, pp. 169-178.

## 付記

本論文は特別な教科道德の特性や他教科との違いについては検討の範囲外である。特別な教科道德に関する専門的な情報を参照される際には、学びの会に照会されたい。

窓口 山口大学教育学部附属光中学校 藤永啓吾